

『現代文A』の特徴

齋藤 祐



『現代文A』の編集コンセプト

今回の『現代文A』教科書は、次のようなコンセプトに従って編集を行った。

1 全五章の構成と短文教材の選定

『現代文A』では、年間を通じた学習課程を五つに分け、「現代の文化を読む1〜4」「近代の小説を読む」とした。これにより、それぞれを独立した大きな単元として扱うことが可能となり、三学期制を敷いている学校の場合、五つの学習課程を、一学期中間・一学期期末・二学期中間・二学期期末・三学期期末へと切れ目なく対応させることができる。また、

章の内容は、第一章を随想、第二章・第五章を小説、第三章・第四章を評論（第四章には導入として随想あり）というように、教材の種別を勘案して配置してある。結果、二期制を敷いている学校においても時期ごとの教材選択がスムーズに行われ、柔軟な対応が可能となるだろう。収録教材文の新旧バランスについても、近代から現代に至るまでを万遍なくとることができるよう配慮した。小説については、「夢十夜」（夏目漱石）や「山月記」（中島敦）といった重厚な近代文学を最終章に据えた上で、「アマガエル」（太田光）、「旅する本」（角田光代）など、高校生にとって身近な現代の作家を配置してある。また、随想・評論の分野につ

いては、「求めるものに応えてくれる」（三浦しをん）、「最初のペンギン」（茂木健一郎）、「境目」（川上弘美）など、同年代的に活躍する作家・評論家の文章から、「眼差しを交わす喜び」（高畑勲）、「絶え間のない流れの中にある生命」（福岡伸一）を経て、「モード化する社会」（鷲田清一）、「人はなぜ働くのか」（姜尚中）といった現在進行形の問題意識を啓発できるものへつながるラインナップとなっている。

なお、『現代文A』の標準単位時間が二単位であることを考慮し、採録教材文はできる限り簡潔にまとめたものを選んだ。最も短いものは、冒頭の随想教材、「求めるものに応えてくれる」の九六五字であるが、これを含めた随想教材の平均文字数は約一七〇〇字（編集部調べ。以下同様）となっており、これは、四〇〇字詰め原稿用紙に換算すると、四枚強の分量にすぎない。同じく評論教材は平均文字数が約二六〇〇字程度となっており、こちらも原稿用紙六〜七枚程度であるため、教室で非常に扱いやすいサイズであろう。

小説教材については、最も短い「アマガエル」の一三五一字から、比較的長文

の「旅する本」の五七九六字、「山月記」の六七〇六字まで取り揃えてあるが、平均すれば約四〇〇〇字程度であり、教室で読解するには質・量ともに十分なものとなっている。このように、各教材を短文化することによって、各単元を効率的かつ多様に学習することができるはずである。

加えて、本教科書は本文教材から「ウオーミングアップ」「日本語エクササイズ」などすべてを合わせて、二十九本の教材を六十六単位時間で学習できるように構成してある。この二十九本の半数以上にあたる十五教材について、一単位時間で学習できるものとした。この点についても、教育現場での活用可能性を踏まえたものとなっている。

2 学びのリズムと発展を重視

『現代文A』における学習リズムを生徒が把握し、かつ、学びのプロセスがスパイラルに発展するよう、各章に「ウオーミングアップ」「表現プラザ」「日本語エクササイズ」「文学の名作」の項目を設けた。以下、それぞれの項目について解説する。

(1) 「ウオーミングアップ」

「ウオーミングアップ」では、新聞のコラムを視写する活動を設けた。掲載ページには、見本となる本文と原稿用紙を配置し、そのまま生徒が書き込める形になっている。また、見本の一行あたりの文字数と、その下にあらかじめ用意した原稿用紙の一行あたりの文字数を同じにしてあるため、生徒は書き損じや改行ミスなどにすぐ気がつくことができる。

教員も、生徒が書いた各行頭および最終行を確認することで、生徒の到達度を容易に測ることができる。見(視)て写す「視写」は、国語学習の基本中の基本である。この活動を通じて、丁寧に書き綴る集中力を涵養するとともに、文章表記におけるルールの把握や、手本となる文章を正確に読み取る注意力の育成に資するものと期待される。

(2) 「表現プラザ」

「表現プラザ」では、物語の創作、広告文や自分語りのエッセイの作成という課題を設けた。一枚の絵画や写真、エッセイなどをきっかけとして、文章を組み立てることが容易となるようにしている。

(3) 「日本語エクササイズ」

「日本語エクササイズ」では、対義語

や類義語、四字熟語や敬語について、読む(書く)ために必要な日本語の基本要素をまとめ、さらにわかりやすい文章を作るための工夫についても整理した。

(4) 「文学の名作」

「文学の名作」は、明治から昭和中期までの散文・韻文の中から、ぜひ生徒に味わってもらいたいものを抽出し、その象徴的な場面や一節を掲載した。巻末の「資料編」にある「近現代文学史」と合わせて全体を通読することで、日本語の書き言葉が近代から現代にかけてどのように成立し、洗練されてきたのかをとらえることができる。

3 学習の手引き(学びの道しるべ)

詳細については次項に譲るが、従来の読解補助となる設問をより丁寧に展開し、できるかぎりスモール・ステップとできるよう工夫してある。また、生徒が解答を直接書き込むこともできるよう、各問いのあとには十分な余白を設けた。これによって、実際の教室における授業進度の把握や調整の一助となるだろう。

(さいとうゆう・中央大学杉並高等学校)